

研究ノート

価値の実現と幸福についての考察 —価値観を擦り合わせて、幸福を膨らませるために—

山本啓介

1. はじめに

幸福は、人の望んで止まぬもの。

「幸福論」なるものは、世に数多有る。古くは、ソクラテス、アリストテレスのそれが挙げられよう。ヒルティ、アラン、ラッセルのそれは、3大幸福論と言われる。他にも、「〇〇の幸福論」と言われるものは多い。現在の日本でも、心理学や、哲学の立場で著されたものや、文筆家から、タレントに至るまで、多くの人が幸福について書いている。幸福論と言わずとも、文学、音楽、映画等、様々に語られる。タイトルに「幸福」或いは「幸せ」という言葉が含まれる作品は、数え切れない。タイトルに無くとも、そういった内容を扱ったものは、更に多い。それ程に、多くの人々が幸福に関心を持ち、幸福になりたいと願っている。

しかし、なかなか掴みどころが無いというのも、事実だ。幸福か否かは、その個人の主観的判断に依るところが大きいからだ。この主観的な幸福とは別に、客観的な指標を作って、幸福を測定しようということも行われている。

様々に語られる幸福ではあるが、或る価値観の実現が、その人の幸福に繋がることは、確かだろう。幸福を語ることと、価値観を語ることは、非常に似ている。

このノートでは、本学中川先生から頂いた、「価値交流学习」の授業でのデータや、授業の様子を含めながら、幸福について考察する。元々、「価値交流学习」は、幸福について考えることが目標では無いので、筆者のこじ付けになる部分も多いが、御容赦願いたい。

2. 世界幸福度報告から

毎年3/20頃になると、新聞紙上を騒がせていた話題がある。コロナ禍以降、多くの新聞はこの話題に関して、沈黙している。国際幸福デーに発表される世界幸福度報告の記事である。殆ど、「世界幸福度ランキング」として記事にされる。国連の発表も、ランキング形式である。順位が上がったとか下がったとかいうので、騒ぎになっていたが、あくまで相対順位だ。コロナ禍以降、紙の新聞では見なくなった。このご時世に、それどころでは無いと言うことか。同じ新聞社でも、Web版では記事になっている場合もある。

調査は、主観的幸福

「生活評価」として、自分の生活への満足度を0（完全に不満）～10（完全に満足）の11段階で答えてもらう。

「感情」として、肯定的感情・・・昨日楽しかったか、と否定的感情・・・昨日楽しくなかったかの、両方の体験の有無を測る。

更に、

- 1) 1人あたり GDP
- 2) 社会的支援・・・困った時に、頼ることの出来る人が居るか。
- 3) 健康寿命
- 4) 人生の選択の自由度・・・人生で何をするかを選択が、自由に出来るか。
- 5) 寛容さ・・・過去1か月で、チャリティ等に寄付をしたか。
- 6) 腐敗の少なさ・・・社会・政府に腐敗が蔓延していないか。

の項目を加味している。1)と3)は、客観要因だが、他はほぼ主観要因である。

3. 映画『学校』(1993)に観る「幸福とは」

様々な事情に依って中学校に行けなかった、或いは卒業出来なかった人達が通う学校が有る。夜間中学である。(三重県では、漸く2027年開校の予定である。)其処を舞台に、その生徒達や教師達の生き様を描く。山田洋二監督作品である。その最後に近い、クライマックスの場面に、「『幸福とはなにか』の授業」が有る。幸福をテーマとした多くの映画が有るが、幸福とは何かと、真向から議論させるものは、珍しいのでは無いか。

夜間中学の3年生黒井学級の生徒も、様々な境遇で、色々と問題を抱えている。登校拒否(当時の呼称)で、一般の中学に行けず、夜間中学の門を叩いた現役の中学生の江利子。56歳で入学し、読み書きの勉強をし、クラスメイトから「オモニ」と呼ばれる焼き肉店の店主。脳性麻痺で言葉にも不自由の有る修。昼間の仕事がつく、よく遅刻をしてくる和夫。アル中の父の居る家に帰りたくない不良娘だったが、今は美容師になることを目標としているみどり。父が中国人、母が日本人で、差別を受けているチャン。

そんな中にイノさんが居た。自分のことをあまり語らない彼が、或る時語ったことが有ったと、黒井は述懐する。

小学校に入る年に、お父さんは家を出た。間もなく、目の見えないお母さんが倒れてしまった。イノさんは、小さな妹の手を引いて、小学校へ通うことになった。教室で勉強していても、校庭で遊んでいる妹のことが気になって仕方がない。妹も、お兄さんのことが恋しくて、良く泣く。先生には嫌がられる。友達には、馬鹿にされる。それでも、懸命に耐えていた。

3年の夏休み、川で遊んでいた妹が、深みにはまって死んでしまった。それが、自分の責任だと思えて、辛くて辛くて、家を出てしまった。

その後のことは、語られなかったが・・・。

20歳の時に、東京に出てきて、色々な仕事をしてきた。

豚の餌集め。弁当屋の食器洗い。食堂の厨房の掃除。鉄工所の鉄屑の整理。様々なきつい仕事を続けて、五十を過ぎて初めて、メリヤス工場の社員に採用された。

大喜びで、田舎のお母さんに、十年ぶりに電話をしたら、その十日前に自動車事故で亡くなっていた。目の見えない母さんは、バックしてくるトラックに気付かなかったのだ。

イノさんは、一晩中自分の部屋で泣き明かしたと。

その時、母さんがいつも、「勉強しなきゃだめだ」、「勉強しないと偉い人になれない」と言っていたことを思い出して、この学校（夜間中学）に来た。

初めて、夜間中学にやってきたイノさんは、赤ら顔。酒に酔っていた。酒の勢いを借りなければ、学校に来られなかったのだ。

そして、医者のお卵に付き添われていた。応対する黒井に対しても、この医者のお卵が殆ど話をしていた。様々な事情で学校に行けなかった者にとって、学校に来るというのは、非常に勇気が要るものなのだ。

イノさんがこの医者のお卵と出会ったのは、献血会場でのことだった。

「俺みたいな人間に、勉強を教えてくれる所は無いかね。字を習いたいんだ。昼間は働いているから、夜教えてもらいたい。兄さんの様な、頭のいい人に聞いたら、きっとわかるだろうと思って」という成り行きがあった。たまたま、この医者のお卵が非常に良い人で、丁寧に対応して、夜間中学まで付いて来てくれたのだ。

それからのイノさんは、授業後も一人教室に残って勉強をする熱心さだった。

そんな或る日、イノさんは体調を崩し、会社も学校も休んでいた。黒井が見舞いに行くと、古ぼけたアパートの暑い一室で、窓も開けずに万年床で横になって居た。窓を開けると、直ぐ横を走る高架の電車の轟音が飛び込んで来た。

すぐに病院に行き、早速検査をしてもらったが、その結果が出る前に、医者のお卵は言った。大変な状態で、イノさんの体はもうボロボロだと。長年の無理が祟っていたのだ。

「イノさんは、即日入院だった。夏から秋にかけて、イノさんは病院で過ごした。もしかしたら、イノさんの人生の中で、最も安らかな日々だったかも知れないな」と、黒井は言っている。そして、3月の卒業式までに、良くなって戻って来ると約束をして、故郷の山形に帰って行った。

卒業式を間近に控えた頃、イノさんが亡くなったとの知らせが入った。

これが、猪田幸男と、幸せを願って命名された人の一生だった。

黒井は、時間割を変更してもらい、ホームルームの時間として、イノさんについて話し合っ、手向けとすることにした。これが、「『幸福とはなにか』の授業」である。

授業では、先述の様にイノさんについての思い出等が語られる。

「『夜間中学に入れて、俺は幸せだ』と言っていた」というオモニの言葉から、幸せとは

何だろうという話に発展していく。

初めの議論を要約すると、

幸せというには、余りに過酷な人生だ。父親に捨てられ、妹を亡くし、義務教育を終えることも出来ず、50歳過ぎてから夜間中学で平仮名の勉強をしている。きつい仕事で体を壊し、母親も亡くし、家族は居ない。寂しくて惨めな人生ではないか。

以下、主要な発言を拾うと、

「死んだ人のことをそんな風に言うもんじゃない。俺は幸せだと思ってあの男は死んだんだよ。だったらそれでいいじゃないか」

「止めろ！ イノさんが幸せだとか、不幸せだとか、そんなこと他人が口出すことじゃねえだろ！」

「先生、幸福ってどういうことなんだろう」

「お金かなあ」という意見も出る。ここで、皆は顔を見合わせて苦笑する。黒井が、「なんだい、おかしくないよ。ちっともおかしくないよ。いい答だよ。修は自分の思っていることを正直に答えたんだから。そうだよ、幸福は金だよ。誰だって金が欲しいもん。俺だって欲しいよ。みんなだってそうだろう。オモニなんかいつも言ってるじゃないか。金さえあればこんな苦労はしないですむんだよ。な、オモニ」、「どうしたの？ 何黙ってるんだ？ 何考えてんの？」

「金が欲しいなんての当たり前のことだろう。そんなセコイことじゃないんだよ、今私たちが考えてるのはさ」

そして又、自分の感じた幸せについて、具体的に語り出す。

「俺よくわかった。幸せというのは金じゃないんだな」

「そうよ。だってお金は遣ってしまったらなくなってしまおうでしょう。でも幸福っていうのは遣ったらなくなるような形のあるものじゃないのよ」

「つまりよ、ああ生きてえなあとか、生きててよかったなあとか、そういうことだよな」

「それならよくわかるよ」

「だから、つまり幸せっていうのはな……」

「何、どういうこと？」

「うるせえ」

「だめだ、わかんねえ。江利子、お前代わりに言ってくれよ」

「だから、それをわかるために勉強するんじゃないの？ それが勉強じゃないの？」

「そう。そうなんだ」

幸福とは何か、真っ向勝負に出て、逃げた感も有る。

しかし、ここで何等かの答えを出せば良いと言うものでも無かろう。夫々の人の思いや

願いを潜り抜けた所に有るものだとすれば、それは致し方無いところである。何しろ、タイトルは『幸福』ではなくて『学校』である。

4. 価値交流学习より

価値交流学习とは、本学中川先生が行われているもので、「自分自身の理解を目的に『自分の大切にしている価値について』グループで意見を述べあい、他人の意見を批判せず十分に耳を傾け最終的に合意形成を図る体験」である。これは、1年前期「コミュニケーション技術」の中で扱われている。

ここで扱う価値は、「権力」、「健康」（健康寿命）、「学歴」、「愛情」、「名誉」、「金銭」（1人あたりGDP）、「誠実」（腐敗の少なさ）の7つである。（ ）で付記したのは、幸福度調査で関連すると思われる項目である。

個人が、自分の価値観による順位を確立した後、グループでの交流となる。自分と他者の違いを、自分の中で明確にした上で、対話によりグループでの順位を決めていく。夫々の年度の結果を、表1に示す。（1位の価値は、セルをグレーにしている。）年度欄にある人数は、その年度で、この授業を受けた人数である。

この話し合いの様子については、『高田短期大学 介護・福祉研究 第7号』と、同『第8号』に詳しい。

グループでの順位を決める際、対話が目的なので、多数決等の方法は使わない。グループとしての順位が決まらないこともあるが、それは認める。その結果が、表1中の空欄である。順位が同一の価値も複数有る。

表1 7つの価値の順位

年度	グループ	権力	健康	学歴	愛情	名誉	金銭	誠実
2012 14人	1							
	2					4		
	3		1		3		4	2
	4	5		7		6		
2013 24人	1	2	1	6	5	7	4	3
	2							
2014 18人	1	6	2	7	3	5	1	4
	2	6	1	7	2	4	3	5
	3	7	2	4	1	6	3	5
2015 18人	1	7	1	5	3	6	4	2
	2	7	2	6	1	5	4	3
	3	6	3	7	2	5	4	1
2016 22人	1	5	2	6	3	7	1	4
	2	4	1	7	5	3	2	6
	3	5	1	6	4	7	2	3
	4	6	2	5	3	7	1	4
2017 24人	1	7	1	3	2	6	4	5
	2	7	1	5	6	4	2	3
	3	6	1	6	3	5	1	4
	4	7	1	3	4	6	5	2
2018 18人	1	5	1	6	7	3	4	2
	2	6	1	5	3	7	3	2
	3	2	1	5	6	7	3	4
2019 32人	1	7	1	5	4	6	3	2
	2	6	1	4	2	7	3	5
	3	6	1	4	2	7	3	5
	4	5	1	3	4	7	2	6
	5	5	1	7	2	6	3	4
順位の平均		5.6	1.3	5.4	3.3	5.7	2.9	3.6

延べ参加者数：170 グループ総数：28

価値観を押し付けるのではなく、納得と共有が大切にされているのである。その為に、話し合いの中での、価値観の揺らぎも大切にされている。相互理解の中での共有が大切なのだ。

最近では、小学校でも、授業の中でディベートが行われることが有る。話し合いで、何かの結論を得ようとする時、有用な方法ではあるかも知れない。しかし、人間理解と言う時、或いは幸福について語ろうとする時、これはあまり望ましい方法では無いだろう。ややもすれば、相手を打ち負かす、論破する、ということになる。そうすれば、価値観の共有や並立等有り得ないことになる。先の表では、空欄等有り得ないことだろう。

解らないことは、解らない。決められないこともある。そういったものも含めた矛盾体が人間なのだから。

5. 幸福についての仮定

価値の実現が、幸福に繋がるのならば、共通の価値を見付けることは、幸福の普遍化とも言えよう。当然、幸福というのは、個人の欲するものであり、1人称の主観に依るものだ。しかし、それがある程度普遍化可能のものであれば、共通の幸福を得られる訳だ。誰かの何かの様子を見て、幸せそうだと感じる事が出来るのは、その普遍化が可能である証拠だろう。共通の幸福が見出せないところに、大きな不幸が生まれる。最たるものは、戦争だろう。戦争よりも平和の方が幸福である、と言うことが、まだまだ共通のものになっていないのである。私の幸福も、貴方の幸福も、同じ様に大切だと。

ここで取り扱われている「価値交流学习」とは、直接の目標ではないにせよ、幸福の普遍化に繋がるものである。ここでもし、ディベートの様な方法論が用いられていたら、そうでは無かっただろう。幸福は、決定するものでは無いのだから。

ここからは、価値交流学习によって得られた結果から、幸福について考察したい。(サンプル数が少なく、統計処理は向かないが、傾向・特徴は読み取れる。)

各価値に付けられた順位をまとめたのが、表2である。表1で得られた「順位の平均」の順に、価値を並べ替えている。これを、仮に人気順としておく。そして、1~7の順位に何度出現したかを記している。夫々の価値の中で、多かった順位について、そのセルをグレーにしている。すなわち、表2からは、夫々の価値への評価の明確さが読み取れる。価値の明確さというのは、多くの人が同じ様な評価をしているのか、評価が分かれているのかということである。

人気1番は、「健康」である。18の

表2 各価値の順位の出現度数

順位	健康	金銭	愛情	誠実	学歴	権力	名誉
1	18	4	2	1	0	0	0
2	5	4	6	6	0	2	0
3	1	8	7	4	3	0	2
4	0	7	4	6	3	1	3
5	0	1	2	5	6	6	4
6	0	0	2	2	6	8	7
7	0	0	1	0	6	7	9

グループが、1位としている。他の殆どのグループも2位に入れ、3位としたのが1グループだけだ。より下位にしたグループは無い。

ショーペンハウアーは、『幸福について』に於いて、

私たちが何を幸福とし、何を享受するのかということにとって、主観は、客観とはくらべものにならないほど重要である。これは、空腹のときは何を食べても美味しいとか、若者が女神のごとく崇める美女が眼前にいても、老人は何とも思わないとかいうことから、天才や聖者の生き方にいたるまで、事々に確証される。特に健康は、ありとあらゆる外的財宝にまさるもので、**ほんとうに健康な乞食は病める国王よりも幸福である。**（『幸福について』ショーペンハウアー 鈴木芳子 訳 光文社）

と記している。

太字部分は、パスカルの言葉としても伝わっているが、その出典は確認出来なかった。

国王は、権力を持ち、金銭を持ち、或いは名誉を持ち、恐らくは学歴をも持っていたであろう。しかし、その何れをも持たない乞食も、健康であれば、全てを持ちながらの病気の王より幸福だと言う。『幸福について』の元となった『余録と補遺』は、1851年刊行なので、170年以上前に、この結果を言い当てていたことになる。幸福についての認識、考え方が、その基本的な部分に於いて、時代を経て尚あまり変わっていないのは、これも又幸福の普遍化の可能性への査証となるだろう。

「金銭」(2番)については、1~5位に広がっている。「健康」と「金銭」が、同順1位という場合も有る。6位、7位に出て来ないのは、「健康」と「金銭」だけである。すなわち、「金銭」の価値を低く見積もることは無いと言うことだ。或いは、それだけ世の中で、「金銭」が必要とされている訳だ。

「健康」か、「金銭」かという判断では、「金銭が無いと病気になっても病院に行けない」等の意見も有ったと聞く。こういう価値観…幸福については、社会制度が大きく関わっているのだ。日本は、国民皆保険だと言われるものの、医療が無料になるのは、極限られた人だけである。これが、全員無料ということであれば、先の判断…心配は、意味をなさなくなる。病気になっても、金銭の心配なく、優秀な医療を受けることが出来るとなれば、それは大切な価値であり、幸福であろう。イギリス、イタリア、オランダ、ギリシャ、スペイン、デンマーク、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ポーランド、トルコ、カナダ、アイルランド、オーストリア、メキシコの15カ国は、原則医療費についての心配は要らない様だ。それより、「健康」も、「金銭」も、ということなのかも知れない。何れにせよ、背反するものではない。

3番の「愛情」は、1位から7位までと、バラツキが大きい。学生達の言葉は、「金銭がなければ、愛情をはじめ何も得られない。」「健康あつての愛情、富や名声より愛、金銭が

1位と考えるのは性格が悪い。」「愛することは自分を愛すること。」「愛情があれば頑張れる、癒やしになる。」「健康でなくても愛情をもって人と接することで、その人を助けることができる。愛情があっても誠実さがないと、人とのコミュニケーションがなくなり、結婚生活が継続できなくなる。」「お金があれば、愛情・権力などがついてくる。最初はお金の関係だけかもしれないが愛情がついてくるかもしれない。愛情があったとしても誠実でなければ人間関係がうまくいかないと思う。」「愛情があるからこそ誠実になれる。」「愛情がないと人が信じられなくなる。」「愛情は人を幸せにさせる。愛情だけでは健康になれない。」「愛情が認められるには信頼（誠実さ）が必要。」「愛情がないと孤独。愛情がないと子どもが生まれない。人がいないと国がダメになる。愛情がないと愛情のない子が育つ。」「愛情がないと人に優しくできない。」等々で、話題には多く上がっているのである。

フロイトは、『文化への不満』の中で、「愛されるのではなく、愛することに重点をずらす」ことで、自分の愛を個別の対象ではなく、全ての人間に同じ様に向けることが出来ると言う。そして、それは人間が到達出来る最高の心構えだとも言っている。

4番の「誠実」も、1~6位とバラツキが多い。捉えどころの無い価値と言うことなのだろうか。誠実の捉えの例を示すと、『誠実』は人間性だと考えた。学歴があっても健康でもお金があっても、人間性がなければいけない。」「『誠実』とは、人の意見をちゃんと聞く、自分の意見をちゃんと言う。それをまとめられるのも誠実だ。」「政治家が国民から信頼を得るためには誠実さ（嘘をつかない）がないといけない。」「誠実でない人が集まったら、他の人のことを考えずに争いになり、平和な世の中をつくれぬ。」「愛情が認められるには信頼（誠実さ）が必要。」「誠実でない仕事もクビになり勉強も真面目にできずよい学歴を残せない。」「権力は良い方向にも悪い方向にも向くが、誠実が良い方向にしか進まない。誠実があるから権力がついてくる。」等が挙げられている。特に悪い印象は無さそうだが、あまり人気が無い様にも見えるのは、何故か。

「学歴」（5番）、「権力」（6番）、「名誉」（7番）については、3位から7位を占めるが、バラツキの具合も、同じ傾向にある様だ。多いのは低位の方である。留学生が余り学歴を求めているというのは、どう解釈すべきなのだろうか。

先に示した『幸福とはなにか』の授業について、山田洋次監督が、教育学者の田中孝彦との対談を残している。

田中：山田さんがこれまでもずっと追及されてきた幸福とは何かという問題が、あの場面で、真っ正面からとりあげられているわけです。あれを見ていて、幸福とは何かというテーマは、だれかが正解を出して、みんながそのとおり、と言ってすむようなものじゃない、ああいう共同の追及を必要とするような、すごいテーマだということを感じました。別のテーマを追求していたら、必ずしもあ

あならないというような気もしました。幸福とは何かというテーマのすごさと、西田敏行のあの表情というのが、結びついて、印象的でしたね。

山田：成績のいい進学校の子たちは、もっと綺麗に答えるんじゃないでしょうかね。ああいうことにたいして、さらさらと。それなりの答えを、要領よく出すんじゃないでしょうかね。なんら真実の感情みたいなものとかかわりのないところで、中学校を終え、高校を終え、大学へ行って、さらにエリートになっちゃうみたいなことの怖さがありますね、いまの世の中は。どんな答えでも即座にパッと出しちゃうみたいな、受験のノウハウとして。

(『寅さんの学校論』山田洋次・田中孝彦 岩波書店)

30年前に、『「幸福とはなにか」の授業』を振り返って、幸福とは「お金かなあ」という意見を出させ、「金が欲しいなんての当たり前のこと」とも言わせ、そしてそれとは違った価値観に思いを巡らせる。それに対して、「成績のいい進学校の子たちは、…」と言っているのである。単純に、簡単に、即座に、お金じゃないよと答えることに対し、それはスマートではあっても、心の奥底を潜ってはいないと言うことだろうか。心を潜らない幸福というのが、有るのだろうか。有るとして、それは、本当の幸福だろうか。

こうしてみると、「金銭」については、様々なもの(価値)に代わり得るということよりも、それが何の為にどう使われるのかということに意味がある様に思われる。そして、或る価値を得るにあたっての、方法も又、大切なではなからうか。

6. 価値の相対性

価値交流学习では、2017年以降、「健康」が、安定して1位を得ている。最も大切な価値として、認められている。先に触れた様に、ショーペンハウアー以降170年である。パスカルに至っては、400年を数える。

価値交流学习では、7つの価値が決められていた。そして、これらの価値に順位をつけるという課題の下に、互いの価値観を理解する様求められたのである。その結果として、「健康」が1位となる訳だ。では、幸福とは何かと問うてみたらどうなるのだろうか。恐らく、7つの価値だけでは、語ることは出来ないだろう。ショーペンハウアーにせよ、パスカルにせよ、「健康」は、幸福の大きな要素だとは言っているが、これが全てと言っている訳では無い。健康さえあれば、他に何も要らない、のでは無い。だから、順位付けなのである。1つを選ぶのでは無い。7つの価値は、或いはもっと多くの価値は、幸福にとっての相補的な価値とも言えるだろう。これさえ有れば幸福だという、唯一無二の絶対的な価値は存在しないだろう。

価値交流学习の振り返りとして、日本人学生が書いたことの中から、3点紹介する。

- ・グループによって順位が違って国（文化）によって考え方が違うことに気づいた。みんな同じ意見ではないことを知れて面白いと思った。
- ・人にはそれぞれ違う考え方があることがわかった。同じ順位にした人でも理由が違うことがあった。
- ・意見を一つにまとめるのが難しかった。価値観は一人ずつ違うのでまとめることはそもそも難しい。

国（文化）によって考え方が違うというのは、先に医療に掛かる金銭で触れたのが、1つの例になろう。国に依って、制度が違う。文化も違う。そこで醸成された価値観が違うのは、当然のことである。それを、面白いと思えることは、素晴らしいことだろう。

そんな中で、夫々の考えは違っているのだ。それを、順位だけで示すことは出来ない。そこに隠れている理由が大切にされなければならない。

そういった価値観を、まとめることは難しいことだ。

全ての価値観をまとめることは難しいし、その必要は無い。ただ、共通で大切に出来る価値観を見出すこと、共有すべき価値観を見付け、或いは創り出すことは、非常に大切なことだと思う。自分の生命が大切にされているということは、幸福の条件である。そして、貴方の生命も大切にされなければならないと。これが、幸福を共有する最初の条件である。

尚、これらの資料から、出身国、性別、年齢等についての価値観への影響については、有るだろうとは推察されるものの、分析は出来なかった。

7. 例え病気でも

先の『学校』の中では、イノさんは長年の苦勞のために病気で亡くなっている。それでも、彼は幸せだったと言う人も居る。イノさん自身は、夜間中学に入ることが出来て、幸せだったと言っている。

医師で作家の鎌田實が、ある対談の中で述べている一部を、要約して記す。

51歳の末期がん患者が転院してきた。その女性は、別荘地の森の中、1日1組の客しかとらないフランス料理店のシェフだった。そんな料理店があるのなら、私も行きたかったと言うと、「私もがんと闘いながら、もう一度料理を作りたいと思っていました。先生が食べたいと言ってくれるのなら、ここで作らせてください」とのこと。

話は、現実に。一気にフルコースを作る体力は無いので、何回かに分けてのフルコースになった。看護スタッフにもふるまわれ、皆が美味しい美味しいと言ってその料理を頂いた。その患者さんは、「幸せです」と言われた。恐らく、自分はもう料理を作ることは出来ないと思われていたろう。それが、作ることが出来た。死の直前でも、人間は幸せを感じる事が出来るのだ。その方は、結局メイン料理を作ることなく亡く

なってしまった。ご主人にお詫びを言うと、「いや、先生には本当によい時間をいただきました」と言われた。「お世話になった看護師さんや鎌田先生にどんな料理を作ったら喜ばれるかな」と、彼女と一緒に考えた時間、その時がとても幸せだったと。

(『アラン 幸福論』合田正人 NHK 出版)

末期がん患者に、健康な乞食と病気の王様の話をしても、始まらない。だが、末期がんだから得られた幸せも有ると言うのだ。「キャンサーギフト」と言う言葉も有る。直訳すれば、「がんからの贈り物」ということだ。誰しも、健康を望むだろう。しかし、健康を害してしまったら、もう幸福は無いのかと言えば、そうでも無い訳だ。

障害のある人に、かわいそうと声が掛かることがある。そういった眼差しが向けられることがある。だが、障害者だって、幸福を手に入れられるのだ。障壁は大きい。その人に、障害が有ることが問題なのではなくて、日本の社会に有る障壁の大きさが問題なのだ。

もう1つ、例を示す。こちらは、虚構ではあるが、良く出来た映画である。『最高の人生の見つけ方』(2007)だ。ジャック・ニコルソン演じるエドワードは、大富豪で、多くの病院の経営もしている。やり手で、ワンマンで、どんどん事業を拡大していく。そして、まるで王様の様にふるまっている。モーガン・フリーマン演じるカーターは、自動車修理工。以前、大学にも進みかけたが、子どもが出来て断念している。それ以降、ずっと町工場で働いている。真面目で、豊富な知識を持っている。2人の共通点は、末期がんで、余命宣告を受けていること。そしてたまたま、病室が同じだった。

カーターの書いたバケツリスト(死ぬまでにしたいことのリスト)を拾ったエドワードが、これを2人で実行しようと。有能で信頼出来る秘書に諸々準備をさせて、2人は、プライベートジェットで世界を飛び回る。様々な、簡単には出来ない様な体験を重ねていく。腹の底から笑い、感動に涙し、それでも、実行出来ていない項目が有った。「世界一の美女にキスをする」である。エドワードは、娘と長らく仲違いしたままだった。カーターの計らいで、娘と仲直りをし、孫娘にキスをした時に、この項目を「済」にした。彼にとって、どの項目を達成した時よりも、幸福だった。

8. まとめに代えて

アリストテレスは、その幸福論『ニコマコス倫理学』の中で、

われわれの達成しうるあらゆる善のうちの最上のものは何であるだろうか。名目的には、たいがいのひとびとの答えはおおよそ一致する。すなわち一般のひとびとも、たしなみのあるひとびとも、それは幸福(エウダイモニア)にはほかならないというのであり、のみならず、よく生きている(エウ・ゼーン)ということ、よくやっている(エウ・プラッテイン)ということ、幸福にしている(エウダイモネイン)ということと

同じ意味に解する点においても彼らは一致している。

だがひとたび、その「幸福」とは何であるかという点になると、ひとびとの間には異論があるし、まだ、一般のひとびとの所説は智者たちのそれと趣を異にしている。一般のひとびとは、すなわち、あからさまな判然たる何ものかを挙げる。たとえば快樂とか富とか名誉とかを。ただ、その挙げるところはひとびとによって異なり、ときには同一人が異なったものを、たとえば病気のときには健康を、貧しいときには富を上げるようなことさえある。

(『ニコマコス倫理学』 アリストテレス 高田三郎 訳 岩波書店)

と言っている。何分、紀元前の著作である。一般のひとびと、たしなみのあるひとびと・智者たち、というのは置くとして、人生の究極の目的は、幸福であると。そこに到達するために、様々な段階が有る。其処に至るまでの、様々な行為に於いて、様々な価値を実現していくことが大切だと。そんな価値の1つに「健康」もあるし、「金銭(富)」や、「信頼」や、7つの価値を含め、更に様々な価値が絡んでくる筈だ。「名誉」については、価値交流学習を受けた学生達と、アリストテレスの意見は一致している様だ。幸福にとって大切な価値とは、先ず「健康」が挙げられる筈だが、健康が唯一無二な訳ではない。

病気の時に健康を、貧しい時に富を、というのも、幸福が相対的なものとすれば、問題無かろう。そう思うことに、何の不思議も、何の不都合も無い。

様々な価値観は、それらを互いに知り合うことが出来る。認め、尊重し、歩み寄ることも出来る。それらの違いを、大切にすることも出来る。これらは、価値交流学習の中で証明されている。

相手の価値観を認めないことによって、戦争が起こされる。自分だけの独り善がりの価値観のために、多くの障害者が殺される。そして、多くの人々の幸福が破壊されていく。

病気の人も、幸福になることが出来る。障害者も、幸福になれる。それらは、権利である。

追究されるべき共通の幸福、違いを認められるべき価値観を、今こそはっきりさせ、広げていく努力が必要だろう。

謝辞

このノートをまとめるにあたって、中川先生に、沢山の「価値交流学習」の資料を頂くことが出来ました。ここに、感謝の意を表します。有難う御座いました。